平成２３年１２月０７日　南日本新聞

記者の目

鹿屋総局・福留梓

どうなる養豚ふん尿処理

鹿屋市畜産環境センターの運営が10年以内をめどに廃止される方針が波紋を広げている。センターは養豚農家のふん尿処理を行い、肝属川や地下水の水質改善、悪臭対策など環境改善を期待されて10年前に稼働した。

稼働する前は、畑にふん尿をためる素掘による地下水汚染などが問題視されてきた。センターは環境改善に大きな役割を担ってきたが、年間約5千万円の収入に対し、約1億5千万円の維持経費がかさみ、約1億円の一般財源を充てている。

さらに、施設の老朽化が拍車をかけ、設備改修に多額の費用がかかることなどがセンター運営廃止の理由となっている。

現在の利用農家55戸の1人、上村隆志さんは「寝耳に水。建設前の実験プラント立ち上げにも協力した。これまでの過程や利用農家の実情を分かった上での廃止なのか」と戸惑いを隠せない。

廃止後の環境悪化を懸念する声も上がり、市は利用農家に自己処理施設の整備を進める考えだが、新たな施設整備は農家の負担とならないだろうか。上村さんも「施設を自分で整備できるのは55戸の2割にも満たない。廃止されれば廃業せざるを得ず、高齢化で仕事もなく負債を抱える農家もあるだろう」と危ぶむ。

市の養豚産出額は都城に次ぐ全国2位を誇る。環境を守りながら、農家が安心して経営できるよう、推移を見守りたい。